

暮らしの目利き者たれ

数年前に少し交通の便の悪い、山の中腹にある一軒家から街中のマンションに引っ越したときのことである。圧倒的な量の荷物を引っ越し先に収納することは、どうみてもダウンサイジングしない限り不可能なことは明らかであった。父が家を構えたときから引き継いだこともあり、約65年間の「財産」が詰まっていることを思うと、その量を想像することは決して難しいことではないだろう。リフォームや建て替えの都度、荷物整理をしてきたことはあるものの、工事の期間だけ移動しておけば済んだこともあり、根本的に荷物を減らすという発想は浮かばなかった。今回の引っ越しでは、物理的な制約が強すぎて、結果的に半分くらいの量は処分したように感じている。「断捨離」とか「フランス人は10着しか服をもたない」がベストセラーになったこともあり、余計なモノをもたない生活を試してみようか、という流行が、いろいろな柵^{しがらみ}を解くいいわけを作ってくれた気にもなった。

しかし、いざ処分しようとする、なかなかそういうわけにはいかないものである。「1年以上使わなかったものは処分対象」と心に誓っても、1年どころか、あることすらすっかり忘れていたモノを目にすると、やっぱり取っておこうという気持ちが沸き起こってし

まう。かなり思案したが、「同じカテゴリの中で結構大事と思っているモノを初めに手放す」ことを心掛けると、面白いように次から次へと躊躇なく処分できることに気づいた。モノが減ることによるスッキリ感を楽しんでいるといってもいいだろう。作業中に少しの(?)贅肉と脂肪までも体から落ちていくようである。書棚3つ分の書籍や家具は、量さえまとまればリサイクルショップが査定と引き取りに来てくれる。婦人用の和服は、和服専門店が引き取ってくれたが思ったほどの値は付かなかった。自分のいらないものを他人に押し付けるわけではないが、まあ、価値のあるモノとして荷物整理のついでに売ただけでもよしとしよう。

さて、これからはモノを増やさない生活をどのように続けていくかを考えなければならない。今では昔と違って日用雑貨や食品は直ぐに手に入れることができる。街中が自分の筆筒の引き出しや冷蔵庫と思うことにして、余計なモノの購入は控えることにしよう。また、本当に気に入ったモノに直ぐに出会うことはなかなか難しいであろうが、本当にいいモノは長く手元にあり、仕舞い込むことはなかった。ちょっと使って直ぐに押し入れには行かずに長く大事に使っている。暮らしの目利き者にならねばと強く意識させられた。

(一社) 廃棄物資源循環学会 会長 吉岡 敏明

